

格差社会と娼婦

——桐野夏生「グロテスク」を検証する——

種田和加子

ご紹介いただきました種田と申します。私は桐野夏生の『グロテスク』という作品について、娼婦の問題ということで検証をいたします。

つつい早い口になりがちで、前回、先ほどお話しに出ました、イタリアのレッチェというところで話したときに、15分という制約でしたので、もう絶対に15分は超えまいとして頑張ったために、早いと言われましたので、できるだけ今日は、ゆっくりと話したいと思います。私のレジュメは、すでにお配りしておりますので、ご参照いただきたいと思います。

第1章、「わたし」という語り手、反自伝的語り「フリーター」から入ります。

『グロテスク』という作品は、90年代の日本社会で起こった、いわゆる東電OL殺人事件やオウム真理教問題など、作品内ではQ女子高の出身者に当事者としてふり当て、「わたし」という、かなり悪意のある語り手を設定し、現代日本の格差問題を、主に娼婦の存在を通じて前景化した問題作であると思います。

この語り手の「わたし」は、平田という名字を持ちますが、first nameを明かされない。また、高学歴でありながら、年収200万円そこそこのフリーターであることにも注目しておきたいと思います。

スイス人の父と日本人の母を持つ「わたし」は、怪物的な美貌と言われる妹ユリコと常に比較され、Q女子高（私立名門小中高一貫教育校）の外部生（高等部からの入学生）としてのコンプレックスを39歳になっても抱えたまま、かつての同級生への、またユリコへの、その他、かかわった人々への悪意をよろいにして生きてきた人物です。

こういう語り手が、語る対象、ユリコ、ミツル、木島高志、あるいは佐藤和恵と結ぶ関係は、いわゆる優等生だったミツルと、そしてQ女子高の教員であった木島先生とのありようとは対照的です。

ミツルは、オウムを思わせるカルト教団に入信し、刑に服しますが、木島先生との文通によって脱カルトの道を開かれます。しかし、「わたし」は木島先生のような理解者を、初めから拒んでいます。

木島先生の教育者の言語は、ミツルを駆り立てたものや、和恵やユリコの売春のスリリングさには、とうてい及びません。ユリコに木島先生は、「魂が汚れるから、売春はいけない」と説得する。そのような言葉は、極めて凡庸です。「わたし」は、そのライバルへの敵対心を燃やしながら、彼らの言葉を否定し、彼らに否定され、不統一な主体のまま物語ることで、彼らの一部である語り手であることを最後に明かします。

フェミニスト、Shoshana Felmanは『What Does a Woman Want?』において、語る「わたし」の言葉＝声は、男性性の価値観を経由し、あらかじめ疎外されている以上、女性の声による自

伝は不可能であり、他者の物語を読むことで、他者のなかに自分の自伝を読み取ることが手段となると述べています。

これは彼女の論考のなかでは、邦訳としては『女が読むとき・女が書くとき—自伝的フェミニズム批評¹⁾』のなかに収められております。バルザックの『アデュー』の分析とか、なかなか面白いものがございます。

ただし、語る私と語られる私の一致、あるいは自伝による自己への現前というのは、男性にとっても同様に不可能です。語る私が疎外されないような語りは存在しない。女性にのみ自伝は不可能とは言えないという留保²⁾をつければ、フェルマンの認識は正確だと思います。

『グロテスク』における語り手の「わたし」は、他者の告白や手記を読むことで、自己への一定の理解に達しますが、それは、自伝として完結するものではなく、「わたし」の証言、「わたし」への証言の寄せ集めの結果です。

自らの鏡像である小文字の他者の声を吸収することで、「わたし」はQ女子高の実体でもある企業中心社会=日本の亡霊性を徹底して強めていくことになります。最終的には、フリーターから娼婦への道を選ぶということになるわけです。

「わたし」は二人の身近な人間の殺人事件の容疑者の公判に立ち会います。佐藤和恵、彼女は東電OL殺人事件の被害者がモデルであると推定されます。その佐藤和恵の売春日記、「肉体地蔵」の章や、「裸子植物群」のようにQ女子高の内部生による隠微ないじめにより、のちのちまで尾を引く挫折感を、外部生が抱くというこの章は、読み手の、いわばサディズムかマゾヒズムかわかりません。両者だと思いますが、そういったものを喚起する。なかなか読ませる章であるだけに、女性中心の物語として読んでしまいがちですが、それだけではありません。

最終章「彼方の滝音」で、「わたし」は次のように述べています。

…わたしは、ユリコと和恵がその死後、マスコミや世間から下された審判や屈辱を晴らそうとしているのでしょうか。いいえ、違います。(中略)はっきりした理由はわたしにもわからないのです。しかし、ただひとつだけ思い当たることがあります。

それは、ユリコも和恵もミツルも、高志もチャンも、「わたし」という人間の一部であったかもしれないということでもあります。わたしは彼女たち、彼らたちの魂としてこの世に残り、漂い、語るべき存在として在るのかもしれない

高志というのは、Q女子高の生物の教師、木島の息子ですけれども、ユリコの女衞をしていたということが発覚し、高校を退学し、それ以後も裏の世界で生きており、同性愛者です。階級社会のミニチュアを生きたのは、Q女子高生だけではなく、木島も同様です。

また、チャンは、富める国日本に密入国し、ユリコと和恵の殺人容疑で審理中、妹との近親相姦があったらしい、謎めいた人物です。

引用した「わたし」の語りは、いまだ生きているミツルや木島や、高志やチャンを、あたかも死んだ人物であるかのようにみなしています。転落した彼女たち、彼らたちは、これはらの人物に限らず、予備軍は大勢いるとも言いたげです。

ここのところですが、例えば、「わたし」の語る内容は、他人の悪口や噂話のようでありながら、

「わたし」のことだったかもしれないと思わせる。

例えば、ミツルによって「あなたと和恵さんはよく似ている。体育の時間に、ださい、ビンボーと言われて泣いたじゃないの」といわれる言葉。それは和恵が、このQ女子高の制服の一部ですが、ハイソックスにラルフ・ローレンのブランドの刺繍をしていたエピソードというのが紹介されます。

それは「わたし」によって、和恵のことだと言われてはいますが、ミツルの指摘によれば、それは語り手の「わたし」のことだったかもしれないと思わせたとするわけです。また、語りのレベルでも彼ら、彼女らと、その一部を分かち合っています。

例えば、「みなさま、この長く退屈な物語もそろそろ終わりに近づいております。私もまともに入っておりますので、もうしばらくのご辛抱を」というのは、チャンの上申書でも使われているフレーズです。「私の長い物語もそろそろ終わりに近づいております」と酷似しているわけです。

そういう意味では、「わたし」は、またミツルへの、ほのかな恋心も告白しており、そのセクシャリティーも、ヘテロというふうには断定する必要もないと思います。

松浦理恵子は、桐野との対談で、『グロテスク』で参照された東電OL殺人事件をめぐるのは、まさに女を闇として語る言葉が流通した」と述べ、「闇は闇なんだろうけれども、でも男が期待するものはそこには無い」³⁾と述べています。

佐野真一の、これも私は面白く読みましたが、『東電OL殺人事件』、また『東電OL症候群（シンドローム）』。こういった優れたルポルタージュではあると思いますが、しかし、最終的に、いわゆる、『墮落論』を踏まえた「黒いヒロイン」というようなファム・ファタルの礼賛、あるいは、久間十義による『ダブルフェイス』。いわゆる女の二面性の物語。数々のトラウマや、コンプレックスの型で解説する精神分析の言語。これらが東電OL殺人事件の周辺では、たしかに開花しました。

ただ、そうなればなるほど、男性社会の敗北者という被害者像、被害者をエディプス・コンプレックスで解釈する図式を補強するものとなります。それは、女の闇の語り手の欲望、女の闇を語りたという欲望を肯定するためのまやかしの自伝的語りなのではないでしょうか。

「わたし」の語りはそうではありません。他者の声を響かせ、その信憑性を保障せず、セクシャリティーにおいても、アイデンティティーにおいても浮遊する存在です。

女の闇を語る言葉への期待に沿うようにもふるまいながら、彼らの闇も語り、期待をはぐらかしていきます。チャンや木島、また百合雄という盲目の甥、さらに「わたし」の両親、同級生たちの家庭、すべてに言及すると、ちょっと時間が足りませんので省きますが、すべての家庭に何らかの闇やゆがみはあります。では、作者はユリコと和恵という二人の存在を、どのように定義しているのか。それを見ていきたいと思えます。

それはいわゆる、先ほども出ました東電OL的 cliché をいかに乗り越えていくかということを見定めることでもあります。

第2章、「不安な美、ユリコから和恵へ」というところへいきます。

さて、ユリコは、男性も女性も魅惑する、怪物的な美貌の持ち主で、ニンフォマニアであると語られています。国際結婚の結果、その両親のあいだ生まれたユリコの美貌は、それを奇異

なものとする西洋人のまなざしにさらされ、また帰国子女としても特別扱いを受け続けます。

生活習慣の違いから、対立を繰り返す父と母は国際結婚の困難さを示すカップルであり、そういう両親を持って、突出した美を与えられたユリコは、文化的帰属性を持ちませんが、では、ユリコの美とは結局何なのでしょう。

北山晴一は、グローバル化と美の基準について、「われわれは「だれもがみな美しい」社会に耐えられるか」⁴⁾という疑問を呈しています。引用を読みます。

新時代の美の判断は、デュ・ロゼルなどが夢見ていたような多様化の方向へ向かうかわりに、むしろユニフォーム化の方向へすすむ確率が高まるかに高いように思えて仕方がない。巨大なメディア装置を備えたボーダーレス社会の出現は、文明間での弱肉強食の状況をいっそう押し進めることになるのではないか。

(中略) その結果として「だれもが自分のあるがままの肉体に合う衣服を着るようになる(デュ・ロゼル)」のではなくて、自分の好きな衣服を着られるようにするために自分の身体のを修正する努力を行っているのが多くの女性の現実ではないのか。(「衣服は肉体に何を与えたか」)

このように述べています。

結局、そのグローバル化によって、例えば、豊満な美、あるいはプロポーション、そういったものが、多様であっていいということにならない。そういう傾向を、北山は指摘しているわけです。

北山が危惧するように、美の多様化を許容しないボーダーレス社会における美のカノンを、一時的にですけれども具現化した、まれなる例がユリコではないか。雑誌のモデルに出ても、またすぐ消え、女優にも向かず、高級娼婦、街娼へと下降し、その美を使い果たして死んでいきます。あたかも、人造人間の役割の遂行と解体の末路にも似ているかに思えます。

衰えてからのユリコは、整形に失敗したような顔と客に評されるが、一定期間有効性を持つその顔と、肉体に与えられた絶対的な美の基準から見放された、その結果です。

ユリコがそうであったように、メディアは常に、代わりの利く美の基準への適合者を発見し、消費します。ユリコは姉である「わたし」や和恵、その他の女性や男性に、美は多様であるという安らぎを与えませんでした。

外見的な少女性は、早々と退却していき、ユリコは木島という生物の教師以外、知性にも内面にも関心を持たれません。ただし、ユリコはニンフォマニアであっても、ミツルも姉も、やがては認めるように、まったくの無知ではなく、娼婦の哲学というものを身に付けていたように見えます。

その例を出してみます。

和恵の売春日記に記されたユリコの言葉として、「客が若い娼婦を買いたがるのって、肉体の魅力じゃないのよ。若いということは未来があるから、男たちは若い娼婦が持っている時間を買うんだと思うわ」。

あるいは、殺されたユリコと和恵の幻覚上の問答。「あたしたち歳取った娼婦はね、男の何か

を暴く存在なんだから憎まれるだけよ」, 「何を暴くのかしら」「空虚よ。空っぽだってことを」というような、なかなか立派な哲学があるというわけです。

第3章, 「娼婦の表象, 和恵の選択, 再び「わたし」へ」です。

さて, ユリコは絶頂期の美貌が衰えると, 佐藤和恵と同じ最下層の娼婦になり, いわゆる直引きの娼婦ですが, 円山町で和恵と再会します。和恵が絶対に手放さなかった夜の外見は, 青いアイシャドーに, 真っ赤な口紅, 長い髪のかつらという娼婦の制服です。これは, 女の闇を語る言葉に過剰に添ってみせるがゆえの攻撃性を持つ, 強力な表象ではないでしょうか。

Q 女子高は, 制服にハイソックス, ローファーではあるが, スカート丈や持ちものの洗練度が, 内部生と外部生とで, まるでまったく違ったとあります。

明治以来, われわれは, 勉強すれば実りがあるみたいな, そういう教えもある程度は受けてきました。もちろん, そういうふうにはならないことは知っていますけれども, 学校は成績以外に, 差異化の基準はないことを建て前としてきました。ただし, 企業の経営者の側にいる内部生, この人たちを上流層と, 作品内では言われています。

つまり, 上流というのは, 旧華族だとか, そういったような層を指すのではなく, 企業の経営者ということです。その子供である彼女たちは, 趣味や美醜など, ハビトゥスにかかわる次元で卓越化を図っています。やはり, どう見ても, もともと生え抜きの生徒たちのほうが, 外部生より洗練されているということですね。見た目の現実です。

この過酷な制服社会の延長上に和恵の選択があると考えられます。ユリコに象徴される美の規範は, 北山の言うように身体に及びます。

和恵は夜の世界, 性の市場を得てからは, 会社の通勤着には無頓着になります。会社もまた能力よりも女性性の基準で隠微に差別する場所だと気づくからです。やせすぎを心配されても, 7号サイズを維持することを鉄則とします。化粧もばっちりだ。みな, 似たり寄ったりのかっこうをしているじゃないのと内心の声で反論をします。濃い化粧, 真っ赤な口紅, 青いアイシャドー, 長い髪のかつらとは, 和恵が選んだというより, それが男性に好まれるという強固な信念にコントロールされています。

これは, 桐野が『グロテスク』を書くにあたって参照した, 酒井あゆみの『禁断の25時』という, 何だかあまり気持ちのいい本ではありませんでしたが, その中に, ホテル嬢というのは, 髪を長くしていること, スレンダーであることが客の好みであるため, ショートヘアの女性がかつらをかぶるといふふうになっています。若さも無論, 優先されるということです。逆に言えば, 買う男性の欲望は若さ, 長い髪といったタイプ化された表象にコントロールされていると言えるでしょう。

髪というのは, 人間の身体の中にあって, 人間になることのない異物。決して, 人間化されようとしぬ物質ですので, ものというより, ある特別な「現象」として存在します。そういうことが『マジカル・ヘアー』⁵⁾などでも分析されていますが, 壊れかけた和恵の長い髪は, 怪談めいてもいます。

アラノ・コルバンは『時間・欲望・恐怖』, あるいは『娼婦』など, 一連の著作で, 女性への恐怖と娼婦の意味づけの深層文化史的解釈をし, 男性は女性への恐れゆえに, 特に娼婦には原始性の横溢というイメージを与えたと言っていますが, これ見よがしの長い髪のかつらは, 原

始性、放縦さを肯定するがゆえに、長い歴史に基づく男性にとっての恐怖の権力を誇示します。

ユリコは和恵に、自分と同じかっこうをせよと命じられ、ユリコは和恵に、腰まで届きそうな長い髪のかつらを付け、チャンに誘いかけます。その姿がチャンにとって、妹であり妻であった美君（めいくん）を思わせ、チャンはユリコに妹になり代わってもらって、快感を得ます。結局、ユリコは、チャンに「あなたの近親相姦ゲーム」と言ったことでチャンを怒らせ殺されますが、長い髪のかつらは、その非人称性により極めて有効です。

チャンという人物は、四川省の貧しい農家の出で、広州へ出稼ぎに行き、ほんとうに目指したのは、アメリカであったと上申書では語っています。彼の貧しさは窩洞（やおどん）という洞窟を住居にしていたことから知れます。

この作品の表題である「グロテスク」の語源である「グロッタ」、まさにグロテスクさの根源から生み出された人物で、ものにあふれ、豊かに見える日本、そしてアメリカにあこがれています。

彼も男妾をしている時期があるわけですが、リーバイスのジーンズや、ナイキのシューズを、彼は感動を持って身に付けたと言います。しかし、ナイキは中国を含む東南アジアの安い労働力を使って生産されたことは有名で、1997年にNGOの批判を受けています。

チャンが自己満足に浸るナイキのシューズが、同国の同様に貧しい中国人の手によるものであった可能性は充分高いのです。チャンはアメリカに渡っても貧困から逃れられないかもしれません。

また、堤未果氏の『ルポ貧困大国アメリカ』⁶⁾によれば、そういう移民層は、搾取のかっこうの標的であることが、よくわかります。

日本社会の一定の富のなかで階層化され、さらに美貌という価値基準によって選別された「わたし」は、和恵の売春日記を読み終え、最終章への準備は整います。他の章と、これは、告げ口、陰口とは異なる位相にあります。

わたしはユリコの陰に生きました。(中略) ユリコを恨みながら育ちました。やっと進学したQ女子高では誉れを感じる暇もなく、級友の豊かさと美しさに圧倒されて、和恵のださい姿に己を見て苛つき、ミツルのように勉強ができれば、と憧れて辛い学校生活を送りました。(中略)

和恵の売春日記は、わたしに新たに生きる力を与えるくらい、悲しい代物でありました。(中略) だからこそ、ユリコの手記はわたしになにもくれなかった。ユリコが本当は強くて賢い女だったのは、わたしだってわかっていました。…わたしに適うものは、何一つとてなかったのです。

生身のわたしは、どこにでもいる僻み嫉み妬み、全部、女偏ですが、そういうコンプレックスの強い凡庸な人間なのでしょうと認める「わたし」は、和恵の日記に突き動かされて、欲望を自覚します。それを誘導するのは、甥の百合雄で、彼は伯母である「わたし」が世の中とディープにかかわっていないと指摘します。百合雄と「わたし」は、ユリコや和恵と同じように円山町に立ちます。

百合雄はネットで評判を得て、売れっ子になり、百合雄は現実に向き合っているという自負と、自分の美への自身に裏打ちされ、「わたし」を軽んじる傾向が出てきます。もはや、「わたし」は百合雄に守られていると思えなくなってまいります。余分な感情を持たず、ネット社会にすんなり溶け込み、その市場で売れることに何の抵抗も持たない百合雄は、娼婦が転落の道だと思っている「わたし（ユリコ、和恵、木島、チャンなど）」にとっては異質な存在です。

「わたし」がチャンの調書やユリコの手記、和恵の売春日記など、言葉の世界に浸透され、熾烈な関係性に生きているのに対し、百合雄はその向こうへと誘います。それは、快樂と死が同居しているような現実界であるかもしれません。

「現在」、というふうに語り手は語り始めます。

現在、わたしは腰まで届く黒いカツラを付け、青いアイシャドウ、真っ赤な口紅という姿で円山町を歩いています。(中略)わたしを侮り始めた百合雄に対する憎しみとわたしも変わりたいという欲望でした。(中略)身を売る女の理由はただひとつ。この世への憎しみです。(中略)憎しみも混乱もすべて背負って、船出いたしましょう。わたしも怖れずに参ります。まあ、わたしの勇気を称えて、あちらで、ユリコと和恵が手を振っているではありませんか。(中略)

「優しくしてよ、お願いだから」。

「いいですよ。だから、あなたも私に優しくして」。

わたしは男が、チャンではないかと目を凝らしました」。

これが作品の一番最後の章の終わりです。

和恵もユリコも身に付けた娼婦の制服。それは、新たな活力を帯びて「わたし」にまといつきます。唇を赤く彩り、その空洞を強調することが、欠損のしるしであるとしたら、強固な社会システムの中かで、女性の美の規範に過剰に適合してみせる「わたし」のような娼婦が、この先、東京に増殖し始めていくかもしれないと思わせる結末は、『グロテスク』のテーマにふさわしいと思います。

フリーターとは、企業中心社会に取りついた亡霊であり、その予備軍にニート、また、彼らから選別されるホームレスなど、いわゆる不審な他者と言われる人々が増えています⁷⁾。もちろん、これは格差社会の結果です。

「わたし」のフリーターから娼婦への転換は、企業の搾取に好都合な労働形態。そのフレキシビリティを皮肉にも徹底させたものと言っていいでしょう。これは現代日本の社会問題です。

注7のところに、ちょっと後半のところに書いてありましたが、渋谷望氏は、ミドルクラスの境界設定はあいまいであるが、ハビトゥスの言語であれば、非ミドルクラスを排除できると。そして、フリーターは、ミドルクラス社会＝企業中心社会の安定性を脅かす亡霊的存在であるという論点から、階級的他者の問題を植民地主義に広げ、排除の構造を論じています。

『グロテスク』における「わたし」が語る階層性は、言語化しにくいハビトゥスによるもので、自己憎悪とコンプレックスにさいなまれながらも、排除する側のハビトゥスにあこがれる。和恵のありようですけれども、そういう循環は植民地社会の比較社会性と共通するということも、

ちょっと付け加えておきたいと思います。

また、「わたし」の影には、同性愛者木島や、男妾チャンも連なっています。この作品の娼婦、男妾や、すべての売春に広がっていくことですが、格差社会で問題となる使い捨て労働と性との結びつきを徹底してあらわにする存在と言えるでしょう。

なお、「わたし」が和恵やユリコと一見、和解したかに見える、この最終パラグラフは、区役所勤務の日常を見限った「わたし」が、彼女たちの側に行くことを強く暗示しており、ある意味では遺書として読めるという可能性も否定できないように思います。

以上で、私の発表を終わります。

注

- 1) 下河辺美智子訳、勁草書房、1998、12、原著1993
- 2) 内田樹「女は何を欲するか？」角川書店、2008、3
- 3) 「新潮」2004、4月1日
- 4) 朝日選書 97、7、pp.76-78
- 5) 伊藤俊治、PARCO 出版局、87、11
- 6) 2008、1 岩波新書
- 7) 渋谷望「万国のミドルクラス諸君、団結せよ！？－アブジェクションと階級無意識」（『現代思想』2005、1フリーターとは誰か）渋谷によれば、ミドルクラスの境界設定は曖昧であるが、ハビトゥス（趣味、美醜、審美、清潔など感情を含む）の言語であれば非ミドルクラスを排除できる。フリーターはミドルクラス社会＝企業中心社会の安定性を脅かす亡霊的存在であるという論点から、階級的他者（不審者、ホームレス、ニートの存在など）の問題を植民地主義にひろげ、排除の構造を論じている。「グロテスク」における「わたし」が語る階層性は言語化されにくいハビトゥスによるもので、自己憎悪とコンプレックスにさいなまれながらも排除する側のハビトゥスにあこがれるという循環は植民地社会の「比較」社会性と共通する。

種田氏報告後の質疑応答

中川 種田さん、どうもありがとうございました。

それでは、これから質疑を重ねてまいりたいと思います。そのままお願いします。

本日わかってきたことは、売春という行為そのもののなかに、ある種の格差社会の読み込みがすでに、なされているということです。

それでは、どうぞご質問、あるいはコメントがございましたらよろしくお願いします。

みなさんのご質問が出るまでのあいだのつなぎで、私から少し疑問点を出したいと思います。

小説『グロテスク』の最後ですけれども、最後の分析である、「わたし」の自殺の可能性ですが、この死は何のためになされるのでしょうか。それは、和恵やユリコの存在の否定ですか。それとも追従というか、殉死のためなのでしょう。

種田 ううん、殉死に近いかなというふうに思いますね。

中川 殉死に近い。

種田 つまり、あらゆる、もっとも危険な、要するに、やくざとかに料金を払って保護してもらおうというような、そういうことも、もう拒否してですよ。いきなり円山町に立つということは、もう守られるものは一切ないということなので、もうそこは、極めて自由であると。

しかし、和恵やユリコが殺されたように、危険な他者と出会うことによって、何かいいことがあるかもしれないけれども、まあ、死んでいくかもしれない。しかし、それはそれで本望だというような、何か非常に怖いメッセージがあるかのように、私は思いました。

中川 和恵やユリコの死も、何て言うのか、事故というよりは、ある意味で言うと、ある種のそうした納得ずくの死というように思えるのですが。

種田 ええ、はい。ですから、例えば、高給をくれる会社で、微妙に差別されながら生きるよりは、こちらのほうがいいというようなことではないのかなと。

中川 そうしたことが男性言説の側から、女性にある墮落の欲望であるとか、それから、いくら女性が頑張っても、ほんとうの幸せは、愛ある生活であるとか、明るい家族であるとかいう言説に、略取というか、搾取される可能性という解釈の危険性はないのでしょうか。

種田 私はそれをね、まったくこれは否定してはいないというようには思うんですよ。ここは微妙なところで、何かそういうところに寄り添ってもみる。あるいは、和恵の売春日記など

のなかにも、優しくされたいとか、注目されたいとか、そういうことが書かれてある。

でも、それとまた逆に、その売春のスリリングさというものも、どうもあるというふうにも書いているわけですね。そういうところでしか出会えないとか、あるいは何か可能ではないようなものがあるようにも書かれている。

私は、だからやっぱりそこが非常に両義的で、どちらというふうには言えない、その描き方が彼女のうまいところかなと思ったりもいたしますけれども。

中川 それではお聞きの皆様、いかがでございましょう。

雨宮 文学研究科博士課程の雨宮幸明です。『グロテスク』におけるユリコの人物造形について質問があります。小説の中でユリコは多くの男性との交渉を欲望する女性としてしか描かれません。彼女の内面をあらかじめ排除したような限定的な人物造形について、疑問を感じてしまうのですが、このようなユリコの人物造形についてはどのようにお考えでしょうか？

種田 いわゆるニンフォマニアとしての自分自身を変えるとかが、そういうことではなくて、もうそれでやっていくんだということですよ。はい。

何て言うのかな。その美貌と、それからそういう欲望というものが、結局、欲望をされる主体であるって。されるということと、欲望するということが、まったく、相違なく一致しているという。

例えば、美貌であって、しかし内面が必要とかね。知性もいるとかというふうには、よく一般的な言葉というのかな、言説のなかではそういうことがありますけれども、彼女が、そういうものはいらないと。だから、内面に関心を持たれても、かえって、木島教師から持たれても困るということなんですよ。魂なんか傷つかないという。

だから、たぶん、女性が美貌と内面とか、才色兼備なんていう言葉もありますけど、そういうものを、もし求められるとするならば、自分が美貌と肉体というか、性的魅力というか、もうそれだけでいいんだと。それで悪いんでしょうかというような存在として、こう造形されているのかなと思ったりするんですが。

雨宮 わかりました。

種田 はい。

中川 だけど、このユリコの造形って不思議ですよ。普通だったら、これだけ市場価値があるわけだから、それをなるべく高く売ろうとするのではないのでしょうか。

種田 いい値とかね。

中川 うん。高い値段で売ろうと考えるわけですけども、それを考えないというか。ごく普

通に考えると、少しかわいくて、タレントになったけれども、頭が悪すぎて売れなかったみたいなね。そういうのと同じに思えるんですけど。

でも、小説の中でユリコがぼつぼつ語ることを拾っていくと、やっぱり、いろいろなことを考えていて、哲学的とも言えそうな思考に至っている人ですよ。

種田 ええ、そうですね。

中川 まあ、もちろん小説の中の人ですから、どこにもいない人だとは思いますが、非常に変わった造形で、なおかつ、その美貌が衰えたあとの彼女の処し方というの、全然変わらないわけですね、衰えたから、私はもうだめだみたいには思わないわけです。そこがまあ、非常に変わった造形と思います。

内藤 本学研究員の内藤と申します。東電OL殺人事件は大事件であり、「殺人事件」という問題の本質を逸れた部分でマスコミが大騒ぎした事件という印象を持っています。ご発表では、作品がその事件を焦点化して問題の本質をえぐり出そうとしたものであると位置付けられました。

ご発表を聞いていて、当時の東電OL事件に関する文脈の中で、この作品がどのように読まれていたのかというのを少し疑問に思ったのですが、小説発表時の同時代評価はどのようなものであったのでしょうか。

種田 最近のルポのほうですか。というか。

内藤 それも含めて、この小説に対する当時の読者の間の受け止められ方はどのようなものだったのでしょうか。

種田 ああ。出たときですか。ううんと、そのときの反響とか、何て言うのかな、批評とかというものに対しては、私はそれほど調べていないのですが、例えば、斎藤環ですね。彼なんかは、容貌による選別というか、そういったようなところから、『グロテスク』をかなり評価していたという。

だから、容貌という問題と、それから、このなかには家族の崩壊というのも出てきますので、そういう、いろいろな壊れ方を見せていく、そのなかの一つとして、この東電OL的なモチーフもあるというのが、私は主流だったような気がいたします。

内藤 そうですね。

種田 はい、ええ。だからやっぱり佐野真一のルポは、何て言うのかな、円山町という場所と、それから、円山町が白川というところでしたね。

中川 岐阜ですね。

種田 うん。そこから流れてきた人たち、電力によって滅ぼされた人たちがやって来た。そこに東電の彼女が立つというところで、そういう地理的な文脈と、一人の女性の崩壊を重ねたというところが、私は非常に秀逸だと思って、すごく感心しているのですが。やっぱりそれと同じことは、たぶん桐野はできないと思うし。

だから、その、何て言うのかな、そういうふうになるまでの、ある女子高という特殊な世界のなかで、どう言ったらいいのでしょうかね、誰かが誰かを、じゃあ、あなたがだめよみたいに、あしざまに言うところも出てきますが、そういう、もう見た目で、一目で、ああ違うと。豊かに育った人と、そうではない人は違うと。そういうゆとりのなさを感じてしまうような傷の受け方みたいなもの、そういうものをかなり強く出したというふうには思うんですけども。はい、ええ。

中川 僕はやっぱり種田さんのお話をうかがっていて、種田さんはあえて読み換えているのではなくて、東電OL事件にまつわってくる、就労外国人の問題などにも及ぶ、現状というものを、よく考えていらっしゃると思うわけです。こうした格差拡大社会のなかの、さまざまなほころびや、ゆがみが東電OL事件という1点に集中してあらわれたものではないかと考えたいのです。

でも、社会的、世俗的にそれをどういうふう読み換えたかと言うと、一人のエリート女性の転落、墮落の物語です。昼はエリートで、夜は娼婦みたいな、ある種の男性幻想を支えていくような素材がそろったということですね。

それに集約させていくということは何か暴力でもあったような気がするんですね。それやっぱり、佐野真一さんのお仕事なんですけども、でも、佐野さんのお仕事の、やっぱり僕は問題点はあると思うんですね。やっぱり、ある種の、何て言うのかな、この人かわいそうみたいな憐れみですね、そういうところは非常に強くなってそこに違和感を覚えます。

だけれども、今日、種田さんが、ちょっと見事に読み換えていただいたように、そうしたものにへ対応していく場合の主人公、もちろん小説の中の問題に限りますけれども、小説の主人公が、ある種のそうした男性社会からの逃亡というだけではなくて、もっと積極的にね、僕の言葉に換えると、ちょっと悪意というものを、てこにして、非常にショッキングな殴り込みをかけているのではないかという風にも思えるのです。もっとあなた方、気づきなさいよという当事者の問いかけがあったのではないか。おそらく桐野は、そこをかなり焦点化したのではないかというふうに、僕は思っているんですけども、いかがでしょうか。

種田 うん。それはもう同感です。はい。

中川 『グロテスク』ってファンも多いですし、これからも読み継がれていく作品だと思うんですけども、ところが、非常に残念なことに、中に書かれているさまざまな人々は忘れ去られていっているわけですね。例えば、この作品の中で言うと、チャンという人なんですけれども。これもいまでも顕在化した問題であるにもかかわらず、隠ぺいされている感じですね。

そして、もう一つは、面白いことが、チャンが初め、男妾しているということなんです。チャンもまた売春をしているという、こういう設定の仕方ですね。つまり、性が貧困の問題と結びついていることは、実は、ここでちゃんと書かれているんですけども、けっこうそのところは抹消されています。

だから、僕たちはもう少し東電 OL 事件に関して言えば、佐野さんも書いてらっしゃいますけれども、非常にモデル本人がお金にこだわったことには、注目すべき点ではないかと思うんですね。

種田 そうですね、うん。

中川 空き瓶の回収をしてセブンイレブンに行って小銭を求めるといようなことは、非常におかしな、奇異なことなのではなくて、対価を求めるとい、資本の向上へ対するある種の異議申立てといつか、自分の権利の主張といようなことがあったのではないのでしょうか。それに対して、やはり私たちは、もう少し注意を払うべきではないかといふうにも思っております。

それでは、他にご質問がないようなので種田さんのご発表を終わります。どうもありがとうございました。

種田 はい。